慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西脇順三郎論
Sub Title	The poet Nishiwaki
Author	三浦, 孝之助(Miura, Konosuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1964
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.18, (1964. 9) ,p.89- 93
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00180001-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西脇順三郎論

三浦孝之助

どういうものか、西脇さんの詩に面白味を感じ、その魅力にとりつかれると、これまでの詩人は詩人でなくなり、その詩が詩でなくなってしまう。みんな街の人となり、街の言葉に溶けてしまう。好きであった漱石や鷗外や芥川でさえも、退屈になってしまう。勿論、少数の偉大な例外はある。芭蕉とか萩原とかシェイクスピアとかキーツなど。だがこれらにしても、もう古めかしいものとなって、西脇詩ほど新鮮味を感じさせなくなる。べつに人間の大きな舞台を取り扱っているわけでもないのに。むしろ、つまらないことばかりとも言えよう。だがそれは妙にじいーんと心の鳴りを鎮め、生命の核心を振い起すのだ。

西脇さんの詩は難解だと言う。なるほど、難解なところがある。しかしよくよむと、その難解な部分が、かえって魅力的なものにさえなってくる。事実これまで詩と称されて来たものの方が、かえって難解なものになる。だから、これほど分かり易い詩はないといえる。分からないと言うのは、これまでのペンキ絵的な文学観念や、うわ滑りの吟遊詩人のうそぶきや啜り泣きなど、そんな過去の亡霊に頭がとりつかれているからだ。そのようなサザエ頭では、どうしても、分からないことになるだけのようだ。そんな固い殻で、この大切な頭を包んでいない人には、これ程分かり易い詩はない。

このことは、何も西脇さんの詩だけに限らない。その詩論でも文学論でも随筆などでも同じことだ。これ程、分かり易くて魅力的なものが、他にないように思われてくる。どこかその辺に、うずくまる小説家とか、気焰をあげている批評家などは、何か古代の気味の悪いバケ物となる。勿論、退屈を感じさせる評論や、随筆なども、あるにはある。世界で最も広大な退屈を。私などは、まだ学生の頃、それはもう、三十年も前、西脇さんの教室で、この広大な退屈の海で、溺死しそうになったことがたびたびある。それは残酷を極めた時間であった。先生自身が、あの濃厚な憂鬱の凝固体。始めから終りまで、一本調子の蜜蜂のようなあの鼻声。果てしもなく続く

冷静なアリストテレス的分析や分類。私などは、ただ眠りに落ちこむことによってのみ、自分を助けていた。

西脇さんのこの広大深遠な退屈を、特に味わいたいと願う読者には、先生に、文学博士の学位を授けてくれた、先生の「古代文学序説」を読むことを、おすすめしたい。

文庫本としてのこの詩集には、勿論、このおそろしい超絶的な催眠薬は、もられていない。読者は安心して読まれていい。

この詩集の解説として、作者自身の解説がついている。それは（あとがき）とか（はしがき）とか（序）として、それぞれの詩集に、ついていたものである。詩集（あんどろめだ）の解説は、幸いその詩の中に作者の詩論があるので、それが出してある。又作者最近の詩論は、（近代の寓話）以後の作品一篇と共に巻末に添えてある。それは、西脇さんの詩論は、いつも、そのまま、西脇詩の解説をなすからである。

西脇さんの詩論は、そのまま詩であって、西脇さんの詩よりも詩であることさえある。詩論が詩となり詩が詩論となる。詩の中で詩論が探られ、詩論の中で詩が求められるのである。詩と詩論が表裏一体となって互いにからみあって、二つが一つとなってみずからの力で進んでゆく。詩が盲目の手探りをする、眼覚めた詩論がそれを励まして、更に先へと押し進めるのだ。西脇詩に一貫性があるのと同じ様に、西脇詩論に一貫性を跡づけることができるのもこの為である。それは時間と共に変化はしたが、人間西脇に一貫性があることと同じだ。

世間は広いので、いろんな人間がいる。いろんな人間のうちに、いろんな詩人がはびこる。しかし偉大な詩人は、そうむやみには、出て来ないものだ。

その詩に詩がなくて、またその詩論にも詩のない人がいる。私などもその一人であるが、この種の人は、詩という火を慕う蛾であって、やがてそのまま朽ち果てる善人であろう。

その詩には詩がないが、その詩論に詩が感じられる人がいる。このタイプは蛾であるが、同時に詩人であって、近頃、特に繁殖して来た。ヴァレリなどは、このカテゴリーにとびこむ偉大な先駆者の一人。その詩のもつ美はインテレクチュアルな高貴な光を放つ。けれども、それはいつも、二流以下の光度にとどまるようである。

次に、これと反対に、その詩に詩があるが、その詩論に詩がないのがある。その人は間違いなく、詩人である。けれどもその詩は、いつも通俗性を滴らすのは悲しい現実。

又、昔の詩人のように、特に詩論らしい詩論のない詩人がいる。そのような詩人の評価は、勿論、その詩の質によって決定される。この種の詩人のうち、超人的なものとしては、シェイクスピアがいた。

最後に、その詩も詩であり、その詩論も詩である詩人がいる。近代の偉大な詩人は例外なくこの種の詩人である。詩人西脇はこの種の詩人の一人だ。

偉大な詩はいつも革命的だ。いつも、その時代の頭をとび越える。その時代が、いつもそれから、顔をそむけるのは、その為である。かつての「私自身は決して詩人ではない。私のつくる作品など決して詩でないところのものである」という言葉も、この革命的な相違からである。この言葉を、何よりの証拠品として、その頃の童謡歌手的商人達は、そのジャーナリズム的生存の確立に、急ぎ立ったこともあるが、その遠い昔の物語り。今日、もう実に立派な西脇論が、数多く出て、その真価を認めてくるようになった。これについて憶い出すことは、これも三十年程前のこと、三田のコーヒ店の白十字で、先生と上田敏雄君とが、いつものように、白熱の詩論をたたかわしていた。どう感じたか上田君は突然地獄の王様のようなカン高い笑い声を爆裂させた。「西脇さんは、何ですなあ、もう死ねませんよ、お気の毒なもんです、あの始末の悪い古典というやつだから、詩人としては世界的ですよ、後からくる連中は、これできっといじめられる、痛快ですなあ」と言って、しばらくタバコを吹かしていたことだ。

この国のミューズの一人、今もなお詩の極限の突端に孤独な影を落す北園克衛、それ自身が巨人的詩的存在である超形而上学的諷刺詩人の上田敏雄、眼もくらむような美しいイメジを、コンコンと噴き上げた幻像の詩人滝口修造、今はかりに詩論家に化けている純粋詩人の上田保、エンサイクロピーデア風の詩論家の佐藤朔、フィルムの親方として億万の涙を集める原研吉、ついに南海の渦巻に巻きこまれて戦死した美男の詩人富士原清一、これらの人物は、それぞれ独自の天分できらめくあけぼのの星。けれども、西脇の存在にふれなかったとしたら、今日までの生長は、なかったとさえ思われるのだ。こう言うと、これらの老いた友人たちは、きっと樫の木の皮のように、笑い出すことであろう。

フランスのシウルレアリストと西脇さんとは違うと、よく言われる。それは当然なことである。フランスのシウルレアリスト達も、それぞれみな違っているのだ。無意識で詩など書けるものではない。ただあの人達は、タマシイの外側にこびりつく、伝統的形式的なサビをこすりとる為に、フロイドの夢の理論を利用しただけのことだ。超現実主義時代のエリュアル、この国でシウルレアリストと言われた滝口修造にしても、強烈な意識と審美視覚を働かして、あの結晶体のような美しい詩をつくったのだ。ブルトンなどの詩の一部などには、西脇詩と見別けがつかないものがある。ただ西脇は自分の詩論のために、一時、あのイズムを利用しただけのことだ。

なお読者の注意を呼びたいことは、西脇さんには詩的心象をつくる天才があるということである。この偶然的な才能にくらべると、シェイクスピアとかキーツなどは、まだなまぬるい。

又西脇さんは、これまでよく、できるだけ詩から音楽的な要素を取り除くと言った。それは普通のメロディのことだ。実にすばらしい内面的メロディが、音の色彩が、創造されているのだ。実に驚くほど新しい近代の詩的音楽（ブレモンのいう呪文）が、流れている。詩だけでなく、散文でもそうである。すばらしい語法とリズムが生まれているのだ。その、美は、あまりにも新らしいので、始めての人には美しく感じられないほどのものである。又一つ一つの言葉の音が実に美しい。今まで雑草のように意識しないでいた言葉が、それぞれ生物のように強烈な印象を残す。美しいイメジが美しい音に転換されるか、音がイメジを燃え立すのか、とにかく異様に生き生きとして、言葉に象徴される物自体よりも美しい。この美はやはり言葉の新らしい結合から生まれるのであろう。新らしい結合は新らしい思考法だ。新らしい思考が言葉を美しくするのか。まだよく分からないが、分かることは、言葉の詩的音楽美の創造においても、天才があるということだ。これまで音楽的要素の大切なことを説いたこの国のどの詩人よりも、はるかに新らしい音の美を生んでいる。エリオットなどは近頃詩劇を書く。もう二十何年か前の小さなものであるが、遥かに美しい詩劇があるのだ。それはあの「紙芝居」という詩。本詩集では、「あとの日の物語り」として出ている。詩劇はまず何よりも詩でつくられねばならない。詩を感じさせなくてはならぬ。エリオットの詩劇には、偉大な詩がない。日本語で書く詩劇は、あの「紙芝居」から、よい暗示を受け、あれを原型としたら、或いはその隆盛を期待できるかもしれない。しかしそれも偉大な詩人のする仕事だ。偉大な詩人がいつ出現するか。これは誰にも分からない。

又西脇さんには他に類を見ない独自な思考法があるということである。その鋭い詩的直観は、目指す対象に向ってまっしぐらに飛ぶ。流星のように鮮明な思考過程の尾を描いて。しかもまともにその対象を突きぬいて行く。それは流動的で、時間的であって、決して固定的空間的ではない。その速度はあまりにも大なるために、時には論理の飛躍を生みテニオハさえも省みないことがあるが、思考の光芒は実に美しい線を引くのだ。凡俗の思索家によく見かけるように、自己の思考過程のみを空間的透視的に築き上げるのとは違う。その対象のぐるりを、はね狂う思考のタランティズムとは違う。ただ盲目的に論理の軽業的操作に自己陶酔するのと違う。又いわゆる哲学史の只単なるもの識りとも違うのだ。ここに独創的な思考をキラメかす真の哲学の新らしい鉱脈が露出している。

西脇詩は超時間的、超歴史的である。永遠のクラゲとして永遠の星雲として永遠に人間を慰めようとする。それは超女的な繊細優婉な感性と情感。超男的な明晰精悍な知性。このほとんど超人間的な要素が混沌として原子爆発を起し、あの星雲的な沈静な詩的美を放射するからだ。世界の文学でも最深のペイソスとイロニィ、最高のヒューモアとサチール、その多彩な閃光をかすかに放電して。

パルナサスの峯に新らしい途をつけた西脇詩の足跡は大きい。今日ほとんどすべての詩人はそのディクションにおいて視覚乃至聴覚上の造型において亡者としてその跡を追う。残りはもうミイラのひからびだ。ある友人は言う。結局この国の世界では、人麻呂と芭蕉と西脇が三つの大なる高峯として残るのではなかろうか。どうも私にも、あらゆる詩人をホロボスように思えて困ることがある。又言う。西脇は今われわれが、まのあたり見る華麗な夕陽の光であると。御自愛を祈る。

（本論文は角川書店の了解を得て、角川文庫「西脇順三郎詩集」（昭和三十二、三、二十）巻末の解説を転載したものである）